

## 報告11 フィンランド

### 校長の挫折と希望



「ようこそ、はじめての方！」と校長はおどける。この学校は3度目の訪問になる。校長の名前はヘルストローム・マルッティ (Mr Hellstrom Martti)。パソコンと音楽好きだ。

ダウン症児など軽度の知的障害のある子らのインクルーシブ教育にとりくむオーロラ小学校をはじめて訪ねたのは2007年1月8日。クリスマス休暇明けの初日。たった15分間の全校集会で校長の見事なパフォーマンスと子どもたちの合唱にこの学校のとりこになった。「大事なのは教員の確保だ」と校長は強調していた。

＊

子どもたち、いやもう彼や彼女たちは、この秋6年生になった。ダウン症の彼と彼女が4人、自閉症の彼が1人、全体で26人のクラスだ。教員1と1アシスタントで児童11人がクラス基準のようで、このクラスは2クラスが合同で運営されている。

この6年生が来年、中学に進学するにあたっての留意点などを校長に質問した。フィンランドは現在、小学校、中学校を統合した「基礎学校」を広めている。オーロラはまだ「小学校」だけなので、この子らは「中学」のある別の基礎学校に入る。

＊

校長は次のように語り始めた。

今年から中学に行った子がいるので、そこで問題があることがわかった。中学は教科ごとの担任制になるので「クラス」がない。学科ごとに生徒が教師のところに行く。クラスの担任となる教師がいない。するとここ(オーロラ)と同じやり方はできない。



サポート含めて、考え直さなければいけないと思っている。

中学とはいま相談していて、障害児だけのクラス(特別学級)をつくり(場の統合: インテグレーション)、そこからたとえば美術などの教科を学びに行けないものか。中学の授業についていけない学科は、たとえば小学5、6年生といっしょにできないか、などいろいろ考えている。

中学の学びの能力差は大きい。そこで担任となる手厚い教員体制とカリキュラムが保障できない。この「インクルーシブ教育」形態はとりくめない。

フィンランドでもまだ新しいこのとりくみは相当なモチベーションがないとできない。

10年後には中学校のいまのような編成も変えなければならなくなるだろう。障害児が担任できるような教育を受けた教員が中学にもぜひ必要だ。オーロラでは障害児4人にアシスタントが2人。1年生のときから同じ支援員がついているのは大事だ。

中学になるとアシスタントは障害児3人に1人となる。学科にもわかれるし、その場合アシスタントがどうなるのかも心配だ。

校長の話はとまらない。

そして、

「学校は、いっしょになにかをやる、それが一番大事だ。小学校時代に学びつつ楽しんで、喜びを感じていく。その結果、学力が上がればいい。人生の基礎をつくるのが大切なんだ」

彼は、全校演劇発表会で主役となったダウン症児のアーポくんの映像を(主演は校長、助演がカイヤ先生、そしてアーポくん)とても嬉しそうにわたしたちに見せてくれた。

(蘭部英夫)